

# シヤンティ

shanti

2011  
夏  
7月号

## 復興の支えになる

特集

東日本大震災被災者支援活動

難民キャンプから

30年



公益社団法人  
シヤンティ国際ボランティア会



2011年3月18日「残っているものはないか」探す男性（宮城県石巻市）

### 特集

## 東日本大震災 被災者支援活動

# 復興の支えになる

3月11日に発生した東日本大震災で、東北から関東の沿岸部は津波により甚大な被害を受けました。SVAでは3月16日から東北地方で支援活動が続いています。「シャンティ」2010年冬号で紹介したように、SVAがめざすのは「地域に根ざした復興支援」。宮城県・岩手県に事務所をかまえ、生活を再建する人びとを長く支えていくことを決めました。

### 今こそ連携をもって 支援活動を



専務理事 茅野俊幸

このたびの東日本大震災によりお亡くなりになられた方々に対し、心よりご冥福をお祈りするとともに、被災されたSVA会員、ご協力者の皆さまに対し、心よりお見舞い申し上げます。未だ行方不明のご家族やご親族の安否を心配される方々の心中を察すると胸が詰まるおもいです。被災地で活動していると、この災害で家屋や財産、多くのものを失いながらも、一日一日を踏ん張りながら生活されているSVAのご協力者にお会いする事がありました。その中には、カンボジア難民キャンプ時代から、SVAの活動にご協力いただいている曹洞宗のご寺院も数多く被災されている事がわかりました。

発災当初から被災地内のSVA協力寺院の多くは、避難所として寺院を開放し被災者を受け入れ、積極的に地域避難所に物資を届けるなど、支援する私たちが逆に励まされる思いでありました。また、東北地方には、平時から地域社会と寺院との密接なつながりが在り、このような災害時にも地域のチカ



1



2



3



4



5

- 1 遺体を見つけ赤いしるしがついた棒を立てる自衛隊員（3月 宮城県石巻市）
- 2 SVA 気仙沼事務所は曹洞宗清涼院の敷地をお借りしている（気仙沼市本吉町）
- 3 小学校での炊き出しの様子。お母さんたちが手際よく配膳していく（4月 岩手県陸前高田市）
- 4 栄養豊富な三陸の海。「海中のガレキを取り除いて、またワカメを育てたい」（気仙沼市本吉町）
- 5 仮設住宅の建設が進む（気仙沼市本吉町）

### 使命を心に刻み、確かな 一歩を踏み出します

東日本大震災救援事業統括責任者  
事務局長  
関尚士



事業統括責任者としてSVAの役割は大きく二つあると考えています。

ひとつは、いままでもなく被害を受けた人々に対する直接の救援ですが、苦難にある人々に「よりそう姿勢」を確に取った取り組みを続けることです。

気仙沼市本吉地区に事務所を置き、15の避難所を2日おきに巡回（4月末現在）、見守りを行っています。人々がこれから仮設住宅へと移っていく中で、被災の苦しみを分かちあい、支えあってきた地縁

の関係も大きく形を変えていくことになるでしょう。阪神・淡路大震災以来、SVAが大切にしてきたもの。それは、くらしの根幹である人と人のつながりを守ること、新たに紡いでいくことを目的とした支援です。

ある地区では被災から2カ月たない頃から、民生児童委員や顔役が中心となって、地縁の関係を守ろうと民謡のサークルを復活させたり、世代をまたいだイベントを行うなど、前を見据えた一歩を踏み出そうとしています。私たちがそうした人々と協力して、その仕組みづくりのお手伝いを始めていきたいと思っています。

ふたつ目は広域的な立場に立った公益への役割。気仙沼市災害ボランティアセンターの開設に発生

です。多くの善意（人・モノ）が全国各地から届くとき、それを受け入れる体制ができあがっていないと、それらが無に帰してしまいます。泥かき、家具のかたづけなど人手がかかるニーズは行政の手が回らないところでもあり、5月の連休までは受け入れ体制ができるようにスタッフを派遣し支援に努めました。

これからは、セクター（行政、企業、組合、宗教団体、NPO等）を超えて、情報と経験の共有をはかり、人々のくらしの再建支援を第一に考えた連携のためのネットワーキングづくり、また政策への提言などを協働して行っていくことも私たちに課せられた大きな役割であると受け止めています。

被災地では、仕事を失ったことによる絶望感が、多くの人に広がっ

ています。本吉地区では、7割の人たちが漁業に携わっていました。船だけではなく、基地となる港や施設がなければ漁には出られないため、漁業を諦める人も増えています。「仕事」という問題から目をそらして、被災地でのくらしの再建はありえないのです。港のインフラの再建は、NGOの手には負いきれない部分ですが、集落ごとの相互扶助・組合組織などを支えていくなど、生業支援にも何らかの形で着手していく可能性を模索していきたいと考えています。

30周年を迎える今年、大きな試練に向き合うこととなりました。苦難の中にいる人々と世界に向き合い続けること。SVAの使命を改めて心に刻み、確かな一歩を踏み出す一年としていきます。

ラが発揮されていることをあらためて再認識をいたしました。SVAもそんな地元の方々と連携する事で、初動時の物資配布、物資倉庫の確保、宿泊拠点、仮設事務所の設置等、支援活動のペースを築き、宮城県の気仙沼の本吉、唐桑地区の各避難所における生活支援活動の展開ができています。SVAとしては、岩手・福島県についても各地の状況にあわせて支援ができるよう努めてまいりたいと強く思っております。限られた体力の中での被災者支援活動ですが、今後も全国各地の地域のご協力者、各団体、ネットワークとの連携を含め、被災地復興に向けた活動を継続してまいります。



# 手の記憶

## SVAの緊急救援活動

「3年後、三陸のワカメを食べに戻ってこい」という漁師の手。「津波で何もかもがなくなった。だから未練はない。あとは復興させるだけだ」力強く、固く握られた青年の手。自分たちで炊き出しをしている避難所の、冷たい水でひび割れたお母さんたちの手。SVAが活動を行っている岩手県南部から宮城県北部で、いろいろな手と出会った。

その手は、これまでも、そしてこれからも、どれだけの涙をぬぐうのだろう。どれだけの悔しさのためにこぶしを握るのだろう。手を、とりあうことで、被災地の人々が、誰かと一緒に歩めると思ってもらえるように願いながら被災者支援の活動を行っている。

### 災害ボランティアセンターの立ち上げと運営

SVAには、阪神淡路大震災の活動をまとめた冊子がある。その中に、「これだけは伝えたい10の視点」があり、最初に挙げられているのが「鍵を握るのはボランティアの活動を行っている」。

### 物資の配布

必要な物資は日々変化する。また女性、子ども、高齢者など個別のニーズも存在する。SVAは宮城県気仙沼市の避難所を巡回し、状況と何が必要かを把握するようにしている。物資を「とりあえず置いていく」のではなく、必要とされているものをお届けすること

ランティア・コーディネーターである」ということ。被災地の人々のニーズに応える仕事は限りなく存在している。そして「被災地、被災者のために何かしたい」という熱い思いを持つボランティア希望者も多い。ニーズとボランティアを的確に結びつけるコーディネーターの働きが不可欠である。

SVAが最初に行ったのは気仙沼市の社会福祉協議会の災害ボランティアセンターの立ち上げと運営支援であった。ボランティア希望者の申請書、ニーズ表など、全国から駆けつけるボランティアを受け入れる土台作りのサポートを行った。

### 炊き出し

で、「物資が第二の災害」にならないようにしている。

避難所によっては、物資の配給がなかなか届かず、津波の被害を免れた家族が米などの食料を出し合い、自分たちで炊き出しを行っていたところがある。食べ物の量も限られていたため、一食おにぎり一個だけだった日もある。温かいご飯を食べてもらうことで、体も心も温めてもらいたいと、協力いただける団体と一緒に炊き出しを行っている。野菜不足になりがちな中で、温かくて野菜が取れる食事は好評である。

### 温泉への送迎サービス

電気、水道、ガスなどライフラインも壊滅状態になった被災地。おっしゃっていた。子どもがいきいきと存分に遊び、自分を表現できる場所を提供している。

また今後は、SVAが30年間取り組んできた移動図書館などの活動も計画している。

今回の震災の被害は甚大で、中期にわたる支援活動になることが予想される。本当の被災地の苦しみはこれからである。神戸でも遅々として復興しない町、仮設住宅で多発する孤独死、復興の個人差による心の溝に人々は疲弊していったのは震災から1年経つ頃であった。

とりあつた手を離さないように、SVAは地元の人々と一緒に復興に向けた活動を行っていく。

(広報課 鎌倉幸子)



2 災害ボランティアセンターの運営を助ける白鳥孝太、鈴木晶子スタッフ



1 気仙沼市災害ボランティアセンターのボランティア受付



6 避難所に設けられた簡易シャワー



8 学用品キットを小学校で手渡す若林英 SVA 会長



学用品キットにはラオスの子どもからの応援のカードが添えられた



### 支援活動の流れ

- 3月11日 東日本大震災発生 (M9.0)
- 3月15日 三部副会長が岩手県陸前高田市から宮城県北部沿岸を現地調査
- 3月16日 市川スタッフ・白鳥スタッフが宮城県石巻市、気仙沼市を調査。気仙沼市災害ボランティアセンター開設準備の協力開始
- 3月21日 NPO法人やまなみと協働して、足湯・最初の炊き出し
- 3月23日 「物資お届け隊」(支援物資を配りながら御用聞き)を開始  
※宮城県気仙沼市に拠点をおき、宮城県北部と岩手県南部で炊き出し、物資配布を始める。気仙沼市本吉地区の避難所を回り始める。
- 3月26日 東京都で緊急報告会を開く(三部副会長、市川スタッフ)
- 3月28日 気仙沼市災害ボランティアセンター開設。引きつぎ運営支援を行う
- 4月5日 図書館活動の可能性について、気仙沼市図書館での聞きとり調査
- 4月7日 最大規模の余震 (M7.4)
- 4月15日 SVA 気仙沼事務所を開設(気仙沼市本吉町清涼院敷地内)
- 4月19日 気仙沼市内11小学校1,764人分の学用品セットを配布
- 5月4・5日 子どもの日のイベント(日本冒険遊び場づくり協会と協働)
- 5月2日~7日 岩手県南部沿岸部と盛岡市、遠野市で図書館事業準備のための調査
- 6月6日 岩手事務所を遠野市に開設



気仙沼市の幼稚園で読む聞かせ(「日本図書館協会」と協働)



9 ボランティアとしてカナダから駆けつけたジョナサン。気仙沼市に留学していた



5 3月の岩手県はまだ雪が降る寒さだった。温かい炊き出しが喜ばれた



4 避難所に野菜を届ける木村万里子スタッフ



3 小泉中学校避難所で、運営者から聞きとりするボランティアスタッフ



6



# 東北の可能性を開く触媒として

## 東日本大震災とSVA



海岸にうちあげられていた牡蠣の殻をひろった(宮城県気仙沼市唐桑半島)

**私**の出身地、宮城県石巻市は、東日本大震災の被災地として頻りに報道されるようになり、全国的に有名になってしまった。

小高い丘である日和山から望む石巻湾は、宮沢賢治が16歳のときに訪ね、初めて目にした海である。それが私のふるさと自慢でもあった。が、このほど帰省してみても、あまりの変わりように呆然としてしまった。海辺一帯の南浜町や門脇町は瓦礫の山と化していた。時折、カモメが飛んで来て、自衛隊員が通るだけのひっそりとした通り。歩いているうちに思わず熱いものが込み上げてきた。辛うじて難を逃れた実家には、津波で家を流された親戚が同居し、避難生活を送っている。あらゆる面で一から立て直さなければならぬ。むろん、私一人ではなく、多くの日本人が抱えている心境に違いない。

### 支え合い、助け合う被災者

「押しつけになってはいけない。相手(国)から学ぶことがないじだ」。これは、カンボジア難民キャンプ以

来、SVAがモットーとしてきた言葉である。今回の大震災でも、被災者の皆さんから学ぶことが少なくない。こういう試練の中でも、いや、こういう試練の中だからこそ輝くものがあることを教えられる。その一つは、災難の極みにあっても、冷静さを失わず、秩序正しく行動しようとする被災者の強さ。そして自ら被災しつづも助け合って生活しようとするその優しさである。それはSVAの活動地でも感じることができた。

たとえば、気仙沼市のお母さんたちはじつに逞しい。漁師である連れ合いが一旦漁に出ると、数週間から数カ月間戻って来ないのだが、そのせいもあるのだろうか。「何ができねば(何かできることはないでしょうか)」と言って、避難所からボランティアセンターにやってきて、ボランティア登録するお母さんもある。被災者でありつつ、被災者を助けようとしているのだ。このような東北の被災者の姿に世界中の人びとが感銘を受けている。そして、これまでにないほど日本に対する支援の輪が広がっている。

### 世界が目にする東北人のスピリット

とくに注目すべきと思うのは、これまで、日本に対する世界の関心は、主に経済やハイテク技術などに對してであったのに対し、このところ、日本人の精神文化に對して関心が寄せられていることである。あるタイの知識人は、被災者の姿に「和」の精神、「武士道」の精神の現れを指摘していた。今から100年以上も前、新渡戸稲造が英文で著した本、「武士道」(1900年、明治33年)の影響のようだ。本書で新渡戸は、日本の武士道で最も重要なものは、劣者に対する愛情、敗者に対する共感、弱者に対する同情の気持ち。それが「仁」である、と述べている。すなわち、武士道の本質は弱者への愛といっているのだ。新渡戸が盛岡南部藩の武士の出身であるというのも因縁めいている。新渡戸は、「太平洋の懸け橋」たらんとして世界で活躍した人であるが、ここに東北固有の魂というものを感ずる。もう一つ、注目されつつあるのが

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩である。

賢治は岩手に生まれ育った詩人である。生まれたのは1896年(明治29年)、明治三陸地震の二カ月後。東北沿岸部を大津波が襲い、死者・行方不明者は約2万2千人にのぼったところである。亡くなる約半年前の1933年(昭和8年)には、約3000人の死者・行方不明者の出た昭和三陸地震が起きている。地震のち、賢治は知人宛のがきで「被害は津波によるもの多く海岸は実に悲惨です」と記している。津波ばかりではない。当時の東北一帯は世界恐慌による深刻な不況と冷害による大凶作に苛まれ、娘の身売りや欠食児童が多く見られたという。「雨ニモマケズ」は、賢治が亡くなる2年前、病床で手帳にしたためたといわれるが、このような背景があつて生まれたものである。賢治が体感していた悲しみや苦しみが集約され、困難に負けず、人びとに寄り添って生きようとする人間像が示されている。

今回の津波で大きな被害を受けた岩手県大槌北小学校の卒業式で、校長先生は、困難な時こそ賢治の詩を胸に強い気持ちをもってほしい、と子どもたちのへのエールとしてこの詩を朗読したという。この詩が東北の人びとの心に深く根づいて

ているか、改めて気づかされる。東北の被災者の姿を見ていると、そこに「雨ニモマケズ」の精神が息づいているように感じられてならない。幾多の試練をくぐってきた東北人の精神的DNAを感じる。

「白河以北、一山百文」と言われ、歴史的に辺境の地として疎んじられてきた東北地方。そこで培われてきた精神文化が世界の注目を浴びているとするなら、東北出身の一人として誠に感無量である。限られた地球資源の中、益々、節約や共助のライフスタイルが問われるであろう。これからの時代には、そのような精神が必要とされているのかもしれない。世界の共有財産として語り継がれるようになれば誠に喜ばしいと思う。

### 東北に新しい(風土)を

ところで、被災者にとって、われわれボランティアは外部から訪れた「よそもの」であることをしっかりと認識しておくことも大切である。たとえば、被災地である三陸地方においては、冠婚葬祭は地域の人びとで協力し合って準備することがならわしとなっている。それゆえ、少しぐらい大人数の調理など、地元

である。炊き出しなども、こちらがモタモタしていると、むしろ、足手まといになってしまう。たとえそうでも、「せっかくならよそから来てくれたのだから」と、何も言わずに寛大に見守っている。何事も、周囲に気遣いをして、ご迷惑をおかけしないように、波風を立てないように、遠慮を美德とする人たちの姿だ。それが彼らのやさしさである。と同時に、多様な人びとと理解し合い、協働する喜びを感じにくくさせる閉鎖性にもなっている。そのような心情を理解して関わる必要がある。主人公は東北の人びとであり、ボランティアはあくまで触媒であり、黒子なのだ。

東北に住むある知人が言った。「東北という(土地)がこれまで当然としてきた価値観を転換するため、背中を押してあげる(風)になつてほしい。そこに生まれるのが新しい東北の(風土)なのだと思ふ」。ただし名言と思つて感激した。東北の人びとが長い歴史をかけて培ってきた伝統を尊重しつつ、東北の人びと自身も気づかなかつた新しい可能性が開かれるための縁となること。それが私たちの役目なのだと思う。

他の被災地のこともいつも心の中にある。福島県では当面、地元

支援の可能性を模索していきたいと考えている。

### 難民キャンプから30年

このような災害救援の現実を思うとき、当会の創設者の一人であり、初代専務理事であった故馬馬成師の言葉が改めて思い起こされる。「難民を救うことができるのは難民自身なのです。難民が自立できるのは、難民自身が本来持っている能力によつてなのです。本来その能力を持っている難民が、たまたま、難民キャンプという状況のなかで、その可能性を開きだされているだけなのです。ボランティアは、ここを勘違いしてはなりません。ボランティアは触媒なのです(拙著『泥の菩薩』大法論より)。

以上の(難民)という言葉を用いて(東北の被災者)と置き換えたなら、まったく今の状況にあてはまる言葉ではないだろうか。SVA創立30周年というこの年に、このような大災害が発生したのも不思議な縁といえなくもならない。これまでの蓄積、経験を生かしつつ、それを深化させ、SVAはさらなる次元に踏み出してゆかねばならない。(広報課 大菅俊幸)



右●5月、被害を受けなかった田んぼでは田起こしが行われていた(気仙沼市) 中●カキの養殖をしていた漁師。カキは種から流されてしまった。復活させるには3年かかるとのこと(岩手県大船港市) 左●駐車場で営業していたラーメンの屋台。電気工事の業者や学生が昼食をとっていた(気仙沼市唐桑半島)





Japan

あなたの身近で、日々の生活の中で工夫して取りくめ、参加できる国内での活動が広がっています。



# アジアの asia no 図書館 toshokan サポーター supporter

えほんの家族になりませんか？  
4月1日から「アジアの図書館サポーター」(旧:チャイルド・ブック・サポーター)に名前が変わりました。私たちがお腹を満たす食べ物、車で言えばガソリン、懐中電灯の電池。動いたり、働いたりするためのエネルギーの部分がアジアの図書館サポーターなのです。アジアの子どもたちのために活動を支えてください。

月々2,000円(もしくは年一括24,000円)で、アジアの子どもたちを笑顔にします!

## こんな活動に役立てられます



### 図書館の運営

図書館では、図書の閲覧、読み聞かせのほか、絵画・工作・折り紙などの文化学習活動も行っています。また、伝統舞踊や楽器を教えたり、世代間の交流の場にもなっています。人々の文化を尊重し、子どもたちに「新しい感動」と「未来への希望」を提供しています。



### 移動図書館活動

移動図書館では、手遊びなどのゲームの後、本や紙芝居の「読み聞かせ」を行います。その後、子ども達が本を読んでもらう「自由読書」の時間をもちます。これらの活動は文字を知り、知識を高め、想像力や思考力を高めてもらう機会になっています。



### 図書館員・教員研修

研修会では、絵本の使い方に関する理論や実践を学び、居心地の良い図書室環境をつくるための専門の知識を学びます。図書室に絵本があるだけではなく、その絵本が活用され、子どもたちの心の奥深くに届けるためにも、人材の育成が必要不可欠です。

### 担当から

5月からアジアの図書館サポーター担当となりました野口早苗です。SVAに入職して5年間、海外事業の経理担当をしてきました。これからは、日頃からSVAを支えてくださっているみなさまと直接つながることのできる窓口となります。どうぞよろしくお願いいたします。



### パンフレットのデザイナーから

子どもの頃、絵本に夢中になった経験は誰にでもあると思います。それは国が違っても変わらない。絵本が持つ楽しさ、それを子どもたちに届ける大切さを伝えたいと思いながらつくりました。(中塩昂希)



## 今期の理事・監事が選出されました

3月26日の定時社員総会において、役員候補者選考委員会から提案された役員改選案が承認され、理事19人監事2人が選出されました。今期は新任の理事2人、監事1人が選ばれています。2011年4月から2013年3月までの2年間の任期で、SVAの運営にあたります。



**会長** 若林 恭英  
長野県・安楽寺住職

**副会長** 三部 義道  
山形県・松林寺住職



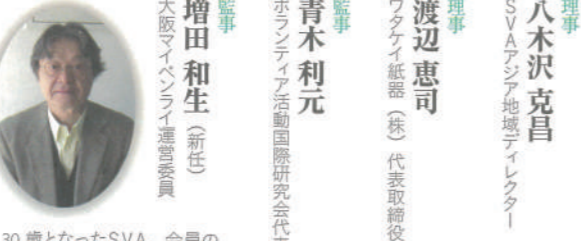
**副会長** 神津 佳予子  
(有) ケイアンドアイ代表取締役社長



**理事** 上原 泰男  
東京災害ボランティアネットワーク事務局長



**理事** 野村 修一  
サービス受益者や支援者の皆さまの更なる満足度向上に向け、SVAのマーケティング力を強化していきます。



**監事** 青木 利元  
ボランティア活動国際研究会代表幹事



**理事** 萩野 頼子  
(株) 紙能製作所代表取締役社長



**理事** 菅岡 賢司  
静岡県・龍公寺住職



**理事** 八木 沢克昌  
SVAアジア地域ディレクター



**理事** 渡辺 恵司  
ワタケイ紙器(株) 代表取締役会長



**監事** 増田 和生  
大阪マイペーパー連合会委員

## 海外スタッフ合同研修 事業運営のレベルを高めるために

2009年から進めている現地職員の人材育成研修。4月23日～26日、「教育事業のための調査・データ分析手法」をテーマにバンコクで行いました。調査とデータ分析についての講義を受けてから、実践に役立つよう、グループで事業形成調査の枠組みと質問票を作成したり、カンボジア事業を事例に全体で検討したり、実際に集めたデータを分析する作業も行いました。参加したスタッフからは「仕事に必ず使います」という決意のコメントも。日本人職員もこの研修が活かせるようにフォローしていきます。  
(ラオス事務所 伊藤解子)



各国職員がグループに分かれて作業した

## 銀座 ソニービルで 街頭募金と報告会

4月24日から5月15日まで開催された「届けたい”銀座の気持ち”震災復興支援チャリティイベント」。SVAは4月29日を担当しました。会場の銀座 ソニービル(東京都中央区)一階のロビーにはSVA紹介パネル、海外から届いた子どもたちの応援メッセージが展示されました。午後1時と3時に行った市川齊スタッフの報告会は満席。外ではNPOサポートセンターのインターン生、SVA理事や代議員、スタッフが協力して街頭募金を行い、11万円の募金が集まりました。  
(海外事業課 吉川次郎)



街頭募金では防災ずきんでアピール

# サバイディー！ こんにちからは ヴィエトナム

写真：瀬戸正夫



店頭にもATMもあるMマート

ラオスに赴任してきてから早いもので3年が過ぎました。この間、ヴィエトナム首都はとて変わりました。真っ先に思いつく変化は、道路を走る車の数がめっぼう増えたことです。大きな四輪駆動車から軽自動車まで様々な車種が目につきます。個人レベルで所有できる層の幅が広がり、また各家庭に合った車種を所有できるようになったのだと思います。一昨年には黄色

い車が目印の民間のタクシー会社もできました。街中も変わりました。郊外への広がりを感じられませんが、ごちんまりとおさまっている街にはオシャレで便利な商業店舗が登場しています。観光客にも便利な「Mマート」というコンビニエンス・ストアが登場。メコン河に沈む夕日を見下ろしながらキンキンに冷えたピアラオを楽しめるレストランがある高層ホテルも。そして、夜には静かな雰囲気デジャズを聴きながらワインを傾けちゃったりできるバーなどなど。

日々変わっていくヴィエトナムですが、何処へ行っても相変わらずのラオスらしいゆったりとした居心地が残っています。街は変わっても人は変わっていませんので、いつでもご安心しておいで下さい。



いまヴィエトナムで流行っているもの

## 都市化が進み 建築ラッシュ

ヴィエトナム首都にきた人が必ず行くラオス最大のマーケット、タラート・サオが変わります。電気製品やシン・工芸品などをおみやげを売っている旧タラート・サオ（左の赤い看板）に加えて、隣に大きな新タラート・サオが2011年中に完成する予定です。



## 本格派の韓国料理

ヴィエトナムでもベトナム、タイ、ヨーロッパ、中国、日本と色々な国の料理が味わえますが、最近は特に韓国料理が増えたようです。辛いものが苦手な歌達していたのですが、伊藤さんや仁井さんのおススメもあり、今ではラオスでマシヨ〜(おいしい)です。

## 夕日を眺める河岸

訪問者の「お気に入りの場所」で必ず名前が挙がるメコンの河岸も整備されて、見違えるように素敵になりました。黄昏時、誰かのことを考えながら思いにふけるのもよし、汗ダクでゼーゼー息をしながらランニングに励むのもよし、です。



## ヴィエトナムの街角から

### 今は雨季のまっ最中

建設ラッシュが続くヴィエトナムですが、雨季が近づくと街の木々は変わらずに青々と茂りだします。街の何処にあるいても緑が道を覆って、心地よい木陰をつくってくれます。雨が多くなるのはイヤですが、木の下でおしゃべりしながら雨が止むのを待つのもいい感じですよ。



鈴木淳子(すずき・あつこ)  
国際コーディネーター、ラオス語も話せるようになりましたが、「発音が難しく、未だに『と』と『魚』と、『おはさん』を言い分けられません。ラオス料理ではカオソイ(北部の鶏料理)が好き、最近はフリン作りにハマっています」

日本にも、子どもに本を買い与えることが増えてきた時代があった。公共図書館の数も足りなかった。そのようなとき、自宅などの一部を開放し、地域の子どもたちに本を読む場を与えたのが文庫活動だ。横浜市郊外で紙芝居教室を開く青木淑子(アキノ・シズコ)の図書館サポーターは、小学校の教師だった。主人の純さんと40年以上前から、この文庫活動に二人三脚で取り組んできた。

# Shanti

シヤンティな人たちが



## いつもふたりで……日本での文庫活動から、アジアでの図書館活動へ

「夫と私で、ボーナスまでつき込んで本を買い集め、全国の小学校の学級文庫や家庭文庫に無料で本をお貸ししてきました」  
淑子さん夫妻がこれまで設立した文庫は、全国各地で100カ所以上。文庫設立の相談に、読み聞かせの指導にと、ふたりで飛び回ってきた。家の玄関のような限られたスペースでも文庫を開けるように本箱づくりを手伝ったり、書棚に雨戸を付けて外に置けるようにしたり、文庫を広める努力と工夫を惜しまなかった。

「夫はすべての本に手作業でビニールカバーをつけ、戻ってきた本のカバーがはがれていると、いとおしそくに貼り替えていました」  
子どもにとって本や図書館がどれだけ大切かをよく知るふた

り。だから、SVAの活動を知って、「はくたちの夢がアジアまで広がった」と心から喜んだ。アジアの図書館サポーターとしての支援を決め、いつかふたりでアジアの子どもたちに会いに行こうと約束した。だが、その夢がかなえられないことはなくなっていました。2010年1月、純さんが病気で亡くなったためだ。

純さんは生前そう言っていたという。だが、うず高く積まれた本の山から目当てのものを取り出すのは、淑子さんひとりでは難しい。淑子さんは迷い、そして決断した。

「夫がこれまで一冊一冊選んできた絵本や紙芝居を生かしたい。それには大人向けの本は放出して、書庫の空気を広げるしかない。夫の気持ちを生かすにはよい方法だと、リサイクル・ブック・エイドを利用することにしました」  
2010年1年間だけでも3000冊以上の本を送った。地下の書庫はそれでも足の踏み場もない。だから、これからはまだまだ本を寄付させていただきますよ」と淑子さんは笑う。

現在、淑子さんは紙芝居教室を月に一度、平日午前を開いている。「まよやかですが保育園や幼稚園に通う前の子どもを抱えた孤独なお母さんのために続けています」

この教室には「卒業」がある。子どもが幼稚園などに通えるようになる。平日の昼前では顔をみせなくなるからだ。今年の春も13人の子どもたちが無事に卒業し、みなに手書きの卒業証書が渡された。さらに、絵本を10冊ずつセットにして貸し出しもしている。子どもたちの成長具合や趣味に合うように、絵本の組み合わせはさまざま。絵本選びに迷うお母さんたちの助けとなっている。絵本を選んだのは亡くなる前の純さんだ。

淑子さんが絵本を読むとき、決してひとりではない。子どもたちの笑顔に励まされるのだという。純さんの子どもたちへのあつい思いも共にある。今日もこれから(国内事業課 古賀東彦)

休みの日は、ちよつと一息…

阪神淡路大震災ではボランティアのあり方から地域のコミュニティをどう守るかまで、さまざまな問題に直面しました。東日本大震災から4カ月がたとうとしている今、復興にあたり、考えるヒントになる2冊をご紹介します。



「法律って何だ? 考えたぞう」(震災がつなぐ全国ネットワーク発行)



「海浜からの出発」(SVA発行)

SVAによる阪神淡路大震災救援活動の歩みを記した1冊。地震発生時の緊急救援はもちろん、その後の復興支援、仮設住宅、「コミュニティ」の再生に至るまで、「これだけは伝えたい10の視点」も含め、2年3カ月にわたり支援を続けたSVAの経験と教訓をまとめました。

# SVAからのお知らせ

## 2011年度総会報告

3月26日、真生会館（東京都新宿区）において、46人（委任状を含めて222人）の社員会員にご出席いただき、2011年度定時社員総会を開催しました。

2010年度の事業報告と決算案、公益社団法人登記が1月4日であったため必要になった2011年1月1日～3日の決算報告案、役員改選案についてご審議いただき、承認されました。

2010年は、円高、指定募金の募金額を見直し、事務局の経費削減などが実を結び、財政問題の改善が

なされました。

東日本大震災の発生に伴い、30周年事業について見直した点について、「本から本へのプロジェクト」は規模を縮小し継続、「未来のかけはしツアー」は中止、東京ならびに各国での記念式典を行う、記念誌は出版、東日本大震災救援事業計画を追加することの報告がありました。

出席者からは「大震災への支援は柔軟性を持って対応してほしい」「市民からの寄付を地道に集める努力が大切」「会員には経験豊富な方が多いので連携して」との意見が寄せられました。

（広報課 清野陽子）

## 東日本大震災救援事業計画が決まりました

2011年3月から2013年3月まで2年間、宮城県気仙沼市および岩手県で活動することが決定しました。また、福島県では当面の間、地元の支援者と情報交換を続け、支援活動の可能性を模索します。

### 事業の展開方針

- 被災者を復興に関わる主体として、自立支援の入口までのサポート
- 地縁社会を礎にした地域の暮らしの再建サポート
- 機関・団体の壁を越えた協働の仕組みを構築する中で、被災者の自立支援に向けて情報共有、政策提言などを行う
- 移動図書館活動による被災者、特に子どもの心のケア活動の広域展開

### 事業の内容

- コミュニティ（避難所、仮設住宅、地域社会）・サポート
- 子どもに対する支援（移動図書館活動、子どもの遊び場づくり）
- 広域ネットワークを通じた課題の共有・検討と提言活動
- 生業支援を視野に入れた暮らしの再建事業

### 事業の実施体制（主な事業担当者のみ）

事業統括責任者 関尚士（SVA 事務局長）  
 気仙沼事務所現地責任者 白鳥孝太  
 岩手事務所事業スーパーバイザー 鎌倉幸子（広報課長兼任）  
 岩手事務所現地責任者 古賀東彦

## 人事のお知らせ

入職	長谷川 香	緊急救援担当（東日本大震災救援事業）契約スタッフ（3月17日付）
	吉川次郎	海外事業課経理担当スタッフ（3月26日付）
	東さやか	緊急救援担当契約スタッフ（4月25日付）
異動	野口早苗	海外事業課経理担当から、国内事業課会員・アジアの図書館サポーター担当へ（5月1日付）
	山室仁子	海外事業課契約スタッフから、海外事業課パートスタッフへ（5月1日付）
	古賀東彦	国内事業課30周年事業アシスタントから緊急救援担当契約スタッフへ（6月1日付）
退職	薄木浩一郎	緊急救援担当契約スタッフ（4月30日付）
	杉本香菜子	海外事業課パートスタッフ（4月30日付）
	服部貴子	国内事業課絵本を届ける運動担当スタッフ（5月18日付）

## 『図書館は、国境をこえる』が出版されました



シャンティ国際ボランティア会編  
 （教育資料出版会刊）

SVAの図書館活動を取りまとめた30周年記念誌『図書館は、国境をこえる』を教育史料出版会より発行しました。図書館の専門家である佐藤涼子専門アドバイザーを編集委員長に、SVA職員が体験をもとに執筆しました。活動の歴史や各国の事情、子どもたちのおかれた状況、そして図書館活動の意義についてまとめた1冊です。

SVAで購入すると、送料込み2300円（消費税分が割引）になります。お申込みは広報課・清野（電話03-5360-1233、FAX03-5360-1220）まで。

## 30周年「未来のかけはしツアー」中止のお知らせ

SVA30年の軌跡を辿りながら、タイからカンボジアを訪れるツアーとして本年11月に計画しておりましたが、東日本大震災を受け、中止といたしました。何卒ご理解いただけますようお願いいたします。 担当◎国内事業課 神崎愛子

## スタッフのついで

■一般企業で17年間、その後ベンチャー企業で4年間の人生を歩んだ後、1995年の阪神淡路大震災の年に、お金儲けはもう十分と考え、アジアの子どものための教育支援を行っているNGOに入り、その後、東日本大震災の年に縁あってあのSVAに入りました。（海外事業課経理担当 吉川次郎 よかやろ）

■国の発展、自立を促すという観点から教育分野に関心をもち、在エチオピア日本大使館にて教育分野で活動する現地NGOや地方公共団体の支援に携わりました。私のやる気の源は、何時間も車で行き、更にロバや徒歩で訪問した小学校で見た一生懸命勉強している子どもたちの姿です。（海外事業課カンボジア担当 利根川佳子 よねかよし）

■絵本出版の仕事に就いていたときに、アジアの現状を知りました。当たり前にあった、絵本にふれる機会のない子どもたちもいる…それ以来、何かしたいと考えようようになって、この仕事につながりました。今は、以前は気付かなかった絵本の持つ力を感じています。（絵本を届ける運動担当 平島容子 さらまよこ）

■編集後記 ■5月、仙台の実家に帰省しました。思い出の海水浴場も変わり果てた姿に。でも、太白山が変わらぬ姿で迎えてくれ、芽生える新緑に心が慰められました。穂やかならば、はっとするほど美しい三陸の海。復興をしっかりと支えよう、思いを新たに東京に戻りました。（清野陽子）

## 公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015  
 東京都新宿区大塚31 慈母会館2・3階  
 TEL 03-5360-1233  
 FAX 03-5360-1220  
 WEB <http://www.sva.or.jp>  
 E-Mail [info@sva.or.jp](mailto:info@sva.or.jp)  
 郵便振替 00150-9-61724

- 当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙（SGS-COC-001773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。